

研究助成実施報告書

助成実施年度	2020 年度
研究課題（タイトル）	ツアー・パフォーマンス研究に資する統合型アーカイヴの構築
研究者名※	高山 明
所属組織※	東京藝術大学大学院 映像研究科メディア映像専攻 教授
研究種別	研究助成
研究分野	都市建築史、都市と文化
助成金額	120 万円
発表論文等	

※研究者名、所属組織は申請当時の名称となります。

() は、報告書提出時所属先。

大林財団2020年度研究助成実施報告書

所属機関名 東京藝術大学大学院 映像研究科メディア専攻

申請者氏名 高山明

研究課題	ツアー・パフォーマンス研究に資する統合型アーカイヴの構築
<p>(概要) ※最大 10 行まで</p> <p>本研究代表者・高山は観客（ツアーの参加者）が都市の中を移動しつつ、指定された訪問地で視覚的・聴覚的な仕掛けを体験として提供するツアー型のサイト・スペシフィックなインスタレーションを「ツアー・パフォーマンス」と総称し、ツアー・パフォーマンス作品を国内外の様々な都市で数多く発表してきた。本研究は、過去のプロジェクトで実践し収集したインタビューや朗読などの音声データ、位置情報、地図データを保存管理するアーカイヴを構築する。本研究では、そのツアー・パフォーマンスをポストドラマ演劇として位置づけ、作品の記録（映像や写真のデータ）はもとより、完成に至るまでに生産される膨大な談話（トークやディスカッション）やテキスト原文、さらには中間生成物（解説やキャプション）などの資源を網羅的に収集し、ツアー・パフォーマンスのアーカイヴを構築していく。さらにアーカイヴを用いてツアー・パフォーマンス制作のための国際的な共同制作プラットフォームの確立を図る。</p>	

1. 研究の目的	(注) 必要なページ数をご使用ください。
<p><u>芸術的な実践と受容者研究の両立による「観客の時代」の演劇的实践は成立するか</u></p> <p>ツアー・パフォーマンスは観客自らの空間の移動をテキストの運動に取り入れ、映像・写真・音声などを用いた空間表現として再構成した表現である点で、脚本の文学性を絶対化し視覚化するドラマ演劇や映画表現とは一線を画している。本研究では、空間の移動を受容者に否応なく意識させ、その運動によって現実の切実さを実感させるポストドラマ演劇としてツアー・パフォーマンスを位置づけ、そこからどのように社会的な現実や政治的な思想・信条が物語として伝えられるのか、という核心的な問いがある。また本研究は芸術的な実践と受容者研究の両立を図りながら、演劇の本質である劇場のあり方を問うことにもなる。古代ギリシャの劇場においては「観客席」が「テアトローン」と呼ばれ、それが「演劇/テアトロ」の語源になったことから考えても、観客と、観客が集う“場”の問題を軸に据えた「観客の時代」の演劇は、実は演劇の本質に立ち帰ろうとする試みにほかならない。この試みは美術におけるホワイトキューブの絶対性への問いにも拡張することができる。</p> <p><u>アーカイヴ構築を通じてポストドラマ演劇とツアー・パフォーマンスとの関係性を問う</u></p> <p>観客も参加者になりパフォーマーになるメタフィクションを共有するツアー・パフォーマンス</p>	

という巡回型インスタレーションはポストドラマ演劇のベンチマークとなるのか、という方法論的な問いがある。本研究では、ツアー・パフォーマンス制作をめぐる、場をめぐる「リサーチ（調査）」、インスタレーションの「プロダクション（制作）」、作品としての「リアライゼーション（実現）」という三つの諸相を、過去において参照したり収集したりした資料や記録あるいは中間生成物のアーカイヴ化を行い、そのアーカイヴを参照点としてツアー・パフォーマンスの制作支援環境を国際的に協調して制作することができるかという実際的な問題にも向き合う。

2. 研究の経過

(注) 必要なページ数をご使用ください。

本研究は、既にアジア・ヨーロッパ・中東の諸都市で行ったツアー・パフォーマンスの成果を踏まえて実施した。本研究代表者・高山がこれまで過去に制作したツアー・パフォーマンスに関連する、作品の記録（映像や写真のデータ）、完成に至るまでに生産される膨大な談話（トークやディスカッション）やテキスト原文、さらには中間生成物（解説やキャプション）などの資源を網羅的に収集しメタデータを作成することで、アーカイヴ構築を目指した。作業の際に設定した基本的な視点として、場をめぐる「リサーチ（調査）」、インスタレーションの「プロダクション（制作）」、作品としての「リアライゼーション（実現）」という三つの諸相を、過去において参照したり収集したりした資料や記録あるいは中間生成物に着目した。

・『東京ヘテロトピア』（2022年・東京／日本）

スマートフォンアプリ（iOS + Android）によるツアー型作品。「東京の中のアジア」を自由に旅する。地図に記された場所（宗教施設、モニュメント、難民収容施設跡地、エスニックレストランなど）に辿り着くと、アプリから詩人・小説家が書き下ろした物語を聴くことができる。見慣れたはずの東京を異国のように旅する中で、観客は自分だけの出会いを重ねる。2022年に新装版アプリをリリース予定。

【メタデータ作成】リサーチ資料・関連シンポジウム資料・記録写真・物語のテキスト・翻訳・ガイドテキスト・アプリデザイン・ロゴ

・『光のないⅡ -エピローグ?』（2021年・新橋／日本）

2011年3月11日に発生した東日本大震災とそれに続く福島原発事故を受けて、ノーベル賞作家エルフリーデ・イエリネクが2012年3月に発表した戯曲『光のないⅡ -エピローグ?』をツアーパフォーマンスとして上演したツアー型作品。

【メタデータ作成】10年越しの再演を通じて、ツアー・パフォーマンスのドキュメント映像の本格的な撮影・編集に着手（監督：藤井光）。2023年一般公開予定。

・『ヘルダーリン・ヘテロトピア』（2020年・フランクフルト／ドイツ）

スマートフォンアプリ（iOS + Android）によるガイドで物語や詩の朗読を聴きながら、全長22kmの「ヘルダーリンの道」を辿りながら歩くツアー型作品。[ウェブサイト](#)とツアーの連動型作品。

【メタデータ作成】リサーチ資料・記録写真・物語のテキスト・翻訳・位置情報・ガイドテキスト・アプリデザイン・ロゴ・特設ウェブサイト

・『続・前橋聖務日課—あかつきの村ウォーク』（2019年・前橋／日本）

インドシナ難民の中でも精神疾患を発症した人たちをも受け入れてきた、前橋・赤城山の麓に位置する「あかつきの村」を舞台にしたツアー型作品。あかつきの村の敷地内に設置されたQRコードを読み取りながら、ガイドマップとスマートフォンであかつきの村の共同体の歴史を体験する。

【メタデータ作成】関連シンポジウム・リサーチ資料・写真・インタビュー映像・ガイドテキスト・ガイドブックデザイン

・『アブダビ・ヘテロトピア』（2019年・アブダビ／UAE）

中東経済の中心地であり、ユートピア的な都市計画から生まれた都市・アブダビをスマートフォンアプリを使ってめぐるツアー型作品。参加者はアプリのナビゲーションに従い街中にある6つのスポットを自家用車かタクシーで回る。各訪問地では6人の作家によって綴られた、そこで起きたかもしれない/起きるかもしれない詩や物語を聴くことができる。

【メタデータ作成】現地リサーチャーによる調査資料・記録写真・記録映像・物語のテキスト・翻訳・位置情報・アプリデザイン・ロゴ

・『リガ・ヘテロトピア』（2019年・リガ／ラトビア）

1930年代にスパイ活動を展開していた小野寺夫妻のリガでの痕跡を、ガイドブックとラジオを手で徒歩あるいは自転車で辿るツアー型作品。地図に記された場所で、ポータブルラジオを指定の周波数に合わせると、ラトビアと日本の6人の作家が書き下ろした物語が聴こえてくる。

【メタデータ作成】現地研究者によるリサーチ資料、物語のテキスト・翻訳・位置情報・朗読音声データ・ガイドテキスト・ガイドブックデザイン

・『新・東京修学旅行プロジェクト：福島編、中国残留孤児編、クルド編』（2018年・東京／日本）

実在する修学旅行をベースに、ありうるかも知れない訪問地をコースに加え、国ごとに東京観光ツアーをつくりシリーズ化するプロジェクト。ベルトルト・ブレヒトの「教育劇（Learning Play）」の理念とツアー・パフォーマンスを「修学旅行」というフォーマットで接続し、2020年の東京オリンピックへ向かう都市、国家、政治の祝祭的統合とは異なる学びの場を都市につくることを目的とした。

【メタデータ作成】記録写真・旅のしおり・音声データのテキスト化・リサーチ資料・ロゴ・[特設サイト](#)

・『ピレウス・ヘテロトピア』（2017年・アテネ／ギリシャ）

スマートフォンアプリによる作品。ギリシアのアテネとピレウス港を行き来した移民・難民の歴史を古代から現代まで調査し、その歴史を辿るツアー作品。

【メタデータ作成】現地研究者によるリサーチ資料、写真、物語のテキスト・翻訳・朗読音声データ・位置情報・ガイドテキスト・ガイドブックデザイン

・『遠くを近くに、近くを遠くに、感じるための幾つかのレッスン』（2017年・横浜／日本）

2017年のドイツ・フランクフルトで展開されたプロジェクト『マクドナルドラジオ大学』では、シリアやアフガニスタンといった国々からドイツに亡命してきた難民が「教授」となり、市内のマクドナルドで「授業」を行った。観客は、横浜の「難民・元難民」たちが朗読するタンデム的な翻訳プロセスによってできあがった『マクドナルドラジオ大学』の日本語版レクチャーを横浜の水辺の街並みを船でめぐりながら聴く。全長1時間のクルーズツアー。

【メタデータ作成】レクチャーのテキスト・翻訳・朗読音声データ・キャプション

・『北投ヘテロトピア』（2016年・北投／台湾）

台北の温泉地・北投を調査し、日本統治時代からベトナム戦争を経て観光地化に至るまでの土地の歴史を辿ったバイクツアー。北投の「ヘテロトピア＝現実の中の異郷」を、地元のドライバーが運転するバイクタクシーに乗り実際の場所を巡り体感する。QRコード/ウェブとツアーの連動型作品。

【メタデータ作成】リサーチ資料・記録写真・記録映像・物語のテキスト・翻訳・ガイドテキスト・ガイドブックデザイン

・『完全避難マニュアル・フランクフルト版』（2014年・フランクフルト／ドイツ）

フランクフルト市周辺のライン・マイン地域に広がる複数の都市を演劇的身振りによって結びつけた、[ウェブサイト](#)とツアーの連動型作品。観客はプロジェクトのウェブサイトを訪問し、問いに答え、地図をダウンロードして40カ所の「避難所」を訪問する。参加者一人ひとりが「あなたにとって避難とはなんですか？」という問いを通過することで、見知らぬ他者と、そして自分自身と都市の中で出会う、約1か月間にわたって上演された演劇的アーキテクチャ／プラットフォーム。

【メタデータ作成】リサーチ資料・記録写真・地図データ・特設ウェブサイト

・『光のないII-エピローグ?』（2012年・新橋／日本）

3.11への応答「光のない。」の続編として発表されたノーベル賞作家エルフリーデ・イエリネクの「エピローグ?（光のないII）」をツアーパフォーマンス形式で上演。観客はポータブルFMラジオを首に下げ、原発事故後の福島で撮影された報道写真を手に、東京・新橋の12カ所のポイントを巡る。ラジオのダイヤルを指定された周波数に合わせると、戯曲を読み上げる少女の声が聞こえてくる。

【メタデータ作成】リサーチ資料・関連トーク資料・記録写真・記録映像・朗読音声データ・ツアーキットの収集

・『完全避難マニュアル 東京版』（2010年・東京／日本）

特設ウェブサイトを訪れ、質問に答えると、山手線29駅すべての周辺につくられた「避難所」が指定され、地図をダウンロードして訪問できる。そこは宗教施設、シェアハウス、路上生活者の集まり、出会いカフェなど、さまざまなコミュニティなどの「東京の時間」からの避難所の数々。

一時的に「避難民」となった観客は、都市との関係を新たに築き直す。ウェブサイトとツアーの連動型作品。

【メタデータ作成】リサーチ資料・記録写真・地図データ・特設ウェブサイト

・『赤い靴クロニクル』（2010年・横浜／日本）

横浜・黄金町を舞台にした横浜開港150年の歴史と現在を問い直すツアー・パフォーマンス。参加者は三人一組となり根岸外国人墓地、米軍施設、根岸競馬場などをめぐる架空の「根岸ツアー」を体験する。ツアーの最後では、アジア系移民による「黄金町語学学院」を訪れ、観客は横浜の発展の光と影を見つめる。

【メタデータ作成】リサーチ資料・記録写真・地図データ・ロゴ・ツアーキットの収集

・『サンシャイン63』（2009年・東京／日本）

第二次世界大戦後、巣鴨プリズン跡地に建てられた池袋サンシャイン60。戦後日本の出発点とも言える歴史的な場所を中心に、1946年から2009年まで戦後の63年をたどる「時のツアー」。観客は5人一組となり、約3時間半かけてサンシャイン60を巡る16ヶ所を旅をする。サンシャイン60が、ツアーを通じて歴史的オブジェへと異化され、戦後史のランドマークへと変容する。

【メタデータ作成】リサーチ資料・記録写真・地図データ・ツアーキットの収集

・『山口市営P』（2008年・山口／日本）

山口市民との共同リサーチをベースに、山口市中心商店街を舞台にしたツアー・パフォーマンス。観客は3人一組のグループとなり、ツアーマップを手に、商店街を90分かけて巡る。

【メタデータ作成】リサーチ資料・記録映像・記録写真・ツアーキットの収集

・『東京／オリンピック』（2007年・東京／日本）

東京観光の代名詞的存在のはとバスを実際に使い、東京都内を巡るバスツアー。東京都が2016年のオリンピック誘致を掲げていた2007年に企画。現在の東京の基礎は東京オリンピック（1964）で作られたという見立てのもと、東京オリンピックのレガシーを巡りながら、当時と現在の東京を「オリンピック＝競争」という観点から比較検討し、東京を再発見する。

【メタデータ作成】記録映像の編集・記録写真・音源データのテキスト化・ツアーキットの収集

3. 研究の成果

（注）必要なページ数をご使用ください。

今回の研究によって、15年にわたる膨大な研究の蓄積をはじめて総合的に収集・整理・データベース化する作業を進めることが可能となった。携帯型情報端末の普及により、いつでもあらゆるコンテンツにアクセスできる環境がある中、アナログ媒体の形で蓄積されていた素材のデジタル化や、ツアー・パフォーマンスの体験を提供している位置情報などを活用したアプリのシステムを次世代まで活用できるように蓄積・運用・保存することで、関連コンテンツ／知的資産に、新たな文化的価値を創造することを目指した。メタデータやインフラ整備が整ったことにより、研究成果にアクセスする回路をジャンルを問わず増やすという点において、より一層の波及効果

が期待できる。本研究成果の一部は、今後 Port B のウェブサイト上での一般公開や、東京メトロとの共同企画による都市プロジェクトとしての展開を予定している。(2022年)

またツアー・パフォーマンスというテーマに絞る形でアーカイブ化作業を行ったことで、メディア表現としての独自性が浮き彫りになり、改めて理論と実践の両面から検証することができた。同時にツアー・パフォーマンスが内包する各都市における歴史的・地理的条件や社会課題のリサーチについても、各都市でのサイトスペシフィックな表現形態である以上欠かせないものであり、かつ各都市の国際比較が可能である点も明らかになった。例えば移民・難民流入の観点から、受入の先進都市フランクフルト(ドイツ)、経済危機後に移民・難民流入を経験したアテネ(ギリシア)、東南アジアから多くの移民を迎えている台北(台湾)、人口の8割が移民労働者であるアブダビ(UAE)、かつてインドシナ難民を受け入れた東京(日本)など、各都市の研究成果を一般にもアクセス可能なデータベースとして公開する方法論としてもツアー・パフォーマンスは有効であると言える。

また、今回の研究作業を通して、アーカイブを参照点としたツアー・パフォーマンスの制作環境を国際的に協調しながら制作することができた。共通資源のデータベース(音声データ、位置情報、地図データ、テキスト、写真など)を整備することで、遠隔でのシステム構築作業が可能となり、ギリシャのプログラムチームとのアプリ構築のための共同作業が可能となった。

4. 今後の課題

(注) 必要なページ数をご使用ください。

本研究から生まれた網羅的なアーカイブがさまざまな巡礼型のインスタレーションを実践する芸術実践での重要な参照となることをめざしつつ、今後は研究成果を一般にもアクセス可能なデータベースの公開にむけた資金確保・チームビルディング・実装作業が大きな課題となる。また、本アーカイブをベースとしたツアー・パフォーマンスの実践と理論化を進める過程で、社会の中に新たな問いを発見し人的及び組織的に多様な接続を生み出すという一種の社会的成熟過程が利害の異なる個人や集団でいかに成立するのかを検証し、ツアー・パフォーマンスという表現の傾向が、どのような条件の下に表現者、鑑賞者、実践の場(都市や地域社会など)のすべてに対して中長期的に有効なエンゲージメント(誓約)を与えうるのかという点も引き続き明らかにしていきたい。同時に、ツアー・パフォーマンスを用いた都市における混在的文化の歴史的条件、地理的条件、現代社会における政治的・経済的条件、社会課題、都市における可能性等を整理することで、都市の文化の新しい分析フレームワークを提唱し、都市政策の策定・評価等への応用に具体的につなげていくことも目指す。